

# 和服構成における体型と縫製との関係 (第1報)

— 標準寸法について —

Relation—ship of Style and Method of Sewing  
in Japaness Kimono Part I  
— about standard size —

羽 生 京 子  
Kyoko Habu

## I はじめに

人間が美しく装いたいという欲望はいつの時代にも共通のものである。その用途が儀礼的なものであれば言うまでもないことだが、実用性の高い作業着や運動服、特殊性の強い宇宙服や実験服などでも、必要な機能を取りつける時、その機能を妨げない範囲で美的感覚を考慮してデザインするのが通例である。

和服が、ことに女性の和服が機能性の面から、日常着の座をしりぞき、儀礼的な衣服となつてから久しい。儀礼的な衣服となればその装い方にいろいろな条件がつけられるのはいたしかたない。和服が日常着であった時代に人々は「どこにどのようなゆるみが出ては見苦しい」などということは二の次として、ゆったりと動作しやすい状態に装い、その中に現われるしわやゆとりを美しいと感じ、女のあでやかさを見いだしたのではないだろうか。儀礼服としての和服が要求される、ととのった美しさを演出するために、胸や腰にパットを入れ、肌着から、否、体型から和服に合った体型、洋服に合った体型と人体を区別し、そうした体型を人工的に作り出そうとする努力がなされているのが現状である。

洋服が縫製の段階で体型に合わせて仮縫を行ない、凹凸の激しい曲面体を現わすために、余分な布をカットし、くせを取ってよりその形に近づけようとするのに対して、平面構成である和服は、あくまで平面的な布の構成によって、四肢、軀幹を覆う大きな袋を作るに過ぎない。従つて和服は着用することではじめて被服になるのであつて、着用されていない和服は一種の美術品、

芸術品として鑑賞の対象物であるといっても過言ではない。和服が儀礼的な服装として用いられるとはいえ、着装されて実際に使用される以上、高度な着装技術が要求される衣服であったり、あるいはある一定の体型でなければ着用できない衣服であってはならない。

こうした考えから、現在、被服構成学の研究者たちはあらゆる角度から研究を重ね、その成果が発表されている。ことに和服構成のなかで技術的に難易度が高く、また、美的表現や個性的表現の現われやすい長着の衿付についての研究が進められている。ある研究者は衿付を集団教育における学習指導方法の立場から、その技術の伝達方法の合理化を求めている。また、あるものは美的表現を追求するために研究がなされている。そのいずれもが過去の経緯にこだわることなく、上達度に関係なく、より容易に美しい衿付線、および上半身の個性的な装いを求める努力がなされている。これら研究のなかで、平面構成の特殊性をある程度の体格の違いがカバーできることや、着用の変化によってその時々雰囲気に合わせてられることを挙げており、これが平面構成の縫製面の軽視、とくに体型に合わせた寸法を考慮するさまたげとなっていると指摘している。こうした指摘は多くの裁縫書が表示している標準寸法、あるいは仕立上がり寸法にあると思われる。

## Ⅱ 標準寸法の変遷

室町時代ごろから表衣化した小袖が、現在の長着のような形態を整えたのは江戸中期ごろからと目されている。江戸初期の小袖はおおむね丈は対丈で身幅が広く、袖幅が比較的狭い。そして、袖丈は仕事がしやすい程度に袖口が小さく丈が短く、全部身ごろについていることが多い。これが徐々に変化して袖幅が広くなり、丈も長くなっていくとともに振八つ口ができ、それにとまって身幅が狭くなり身八つ口が出来たことは、現在残存している遺品を見ても明らかである。

こうした寸法の変化が裁縫書や往来物（初等教科書）、あるいは女子用教訓書やその他衣服について著述されている書物の中にどのように現われ、それが近代にどのように伝えられたのだろうか。

近世にはいって、小袖の寸法についてやゝ具体的に記述されているものの一つに、慶安3年（1650）5月刊の『をんなかゞ見』の「こそでしたてやうの事」（第十五節）がある。

こそでのしたてやうよくよくねんを入べし。身ひろすぐればみなりあしきものなり。すこしはせまきをかんとす。かたのゆきうでのしたながきもいなかめき、又みじかきもいやし。しやうの事もをんななどものていをみたまふべし。身のたけはながきこそよけれ。みじかきはいやし。……  
このように、小袖を仕立てる際の心得が述べられている。これによると着装した姿から仕立上がり寸法について書かれており、女中どもの着ている様子から、それぞれの体格に合わせて肩ゆき

や身幅を決めるようにとして、何寸何分に仕立てるようには記されていない。この文章は続いて「さりながら、殿のすきこのめるをしり」として「殿をもちてよりは、なに事もとののこころにしたがうべし」と、夫を持ってからは、夫の意向を尊重するようにも記されている。このように、主観的な好みに最後の基準を求めているものの、現在のように一定の標準を設けている様子は認められない。もちろん、この書が女子用の教訓書であるから、そこまで踏み込む必要がなかったともいえるが、これに続く、「こそでの地の事」（第十七節）の冒頭に

はぶたへは地のうすきはあしゝ。しわよりてうしろのていよろしからず。からおりのたぐひ  
これまたこはばりてあしゝ。さやはいやしきものなり。さりながらそめのもやうによりてよろ  
し。……………

と記している。このように生地について具体的に詳細な理由をあげて書かれていることを考え合わせると、このころの衣服の寸法に対する考え方は、現在よりはるかにおおらかであったものと推察される。そして、元禄以降に刊行された裁縫書のなかにも、裁ち方図が中心であるためか、あるいは裁ち切った布いっばいに縫うことが普通であったためか、裁切り寸法は記入されているが、仕立上がり寸法は記されていないのが常である。

女子用往来にも裁縫の初歩について記されている。そもそも往来は寺子屋ではじめて勉強をする児童のために編纂された初等教科書である。従って、そこに記載されている裁縫に関する内容は裁ち縫いに対する心がまえや衣服着用の習慣が主で、具体的な裁ち方・縫い方にまで及んでいるものは数多くのなかの約半数くらいである。今回、私たちの調べた女子用往来のなかで具体的に縫い方について述べ、仕立上がり寸法についても触れている例は、江戸時代中期の元文3年（1738）3月に刊行された『女文林寶袋 全』の巻首に記載されている「裁物仕様」が最初である。ここでは、まず、裁ち縫いの業も芸能であり、「しらぬといふは大き成はぢ也」としたうえで、初着、小だちの裁ち方に触れた後に

○ さや、りんず、ちりめんのたちぬいは両袖の其めす方の尺を取、袖をつけて、脇<sup>わき</sup>よりもあ  
りをば取と心得、まへよりおくびを出しつゝ、せよりほそ物取ぞかし。ぬい立ゑりは四寸也。  
おくびはすそはゞ六寸、身は八寸ぞ。袖はゞはそのめす方に合せてぬい給へ。

と記されている。前半は縫い方に触れながら裁ち方を述べ、後半は縫いあげる寸法が書かれている。この文章から出来上がり寸法の固定化は身幅から進んだものと考察される。そして、この文章は多くの往来物に採用され、文政7年（1824）刊の『女今川千代種』の頭書欄に見られる「衣類たちぬひの支」のなかにも記載されている。いかに往来が保守的なものとはいえ、約100年に渡り同じ文章が使われたということは、一度固定化した寸法を変更することの難しさを如実に物語るよい例であろう。そしてまた、平面構成であるがゆえのことでもあろう。

江戸時代末期になるとにわかに、仕立上がり寸法のことについて記されたものが目につく。その一つに『訓 女論語纂寶 全』（1847 年刊）がある。この書の「ぬいものゝ事」の項は詳細にわけられ、裁ち縫いの意義から始まって、手際のこと、直垂・長絹の仕立てようや夜具・座布団・枕・ねまき・蚊帳の事まで述べられている。

その中に

- 一 おんそ何事したてがらにて、むねもあきしどけなく見ゆるよし。人のなりすがたによりてたちぬふべし。ほそき人のこゑりのひろくあきたるはむねあきてあしく、うは着などはひろく仕立べし。

とした後、「小袖したてやうの事」として、次のように出来上がり寸法が記されている。

- 一 小袖したてやうの事 たけは人によるべし。大かたありはぶは四寸五分・五寸、おくび七寸、小つまさき一尺一寸五分・二寸、袖口六寸又は六寸五分、女は四寸又は四寸五分にも、おくびは一はばをたち違ひにすべし。ありかたは女二寸、男二寸二・三分明べし。袖下一尺一寸、男は一尺二・三寸ばかり、裏のふき、袖うらは三分、すそ廻り小づまは二・三分、但し四・五分ふきたるもなんなし。……

いつれもこれはわきづけのしたてやう也。ひとへ、袷なども同じ事也。

続いて、天保8年（1837）より嘉永6年（1853）までの足掛け16年に渡り書き集められた喜田川守貞の随筆集『近世風俗志』の女服（第十五編）に文化文政以前の小袖といまの制（嘉永頃）を比較しながら出来上がり寸法について書いてある箇所がある。それによると「大概中人の用を示。大小准之也」として寸尺は鯨尺を用いたとある。

文政前長け四尺二・三寸 今は四尺 身幅左右各七寸五分 前左右六寸五分 肩行一尺五寸五分 是京坂也 江戸男女とも肩行長く一尺六寸五分

といった具合に記され、袖丈、袖口、衽幅、の寸法が続き、袖丈と帯幅との関係で、袖空や身空すなわち、振八つ口と身八つ口が出来た過程が記載されている。

近代に入ると、このように文章で仕立上がり寸法が記されているのは、明治時代中期ごろまでで、裁縫書や裁縫教科書の体裁が整うにつれて、「普通仕立上げ寸法」・「出来上り寸法」ないしは「標準でき上がり寸法」などとして表示されるようになった。そして、裁縫書や裁縫教科書は年をおって多種多様なかたちで出版されている。そこで、これらの書物に記載している寸法表の幾つかを年代順に取り上げ、標準寸法がどのように変化し、それらの寸法の持つ影響力がどのようなものであったかを調べて見ることにした。第1表の書籍は多数の中から、でき得る限り、各層を対象としたものを取り扱うよう心掛け、前出の江戸末期の2書を含む17種を選び出した。

この表でいえる第一は、仕立上がり寸法一つを取ってみても、著者の編集意図が感じられる。

第1表 大裁女物長着仕立上がり寸法

書名		袖丈	袖口	袖付	袖幅	身丈	身八つ	身肩明	衿き	繰越し	ゆき	後ろ	衽下がり	前幅	衽幅	衿下	合づま	衿幅	備考
1	訓女論語義實全 弘化4年 (1847)			15. }	42. 17. 42.				7.5							43.5 }	17. }		人のなりすがたによりてたちぬふべし。 たけは人による。
2	近世風俗志 嘉永頃 (1853 前後)	47.5	24.5	34. }													13.5 }		大概中人の用を示。大小准之。
		49.5	26.5	36.		152.	5.7				28.5		24.5	15.		13.5	14.		
3	女童裁ぬひをしへ草 明治8年 (1875)	49.5 }				156.					62.5	28.5		24.5					
		53.																	
4	裁縫獨稽古 明治24年 (1891)							裁切り											
		61.	23.	26.5	32.5	150.	11.5	9.5		62.5	28.5	23.	24.5	15.5	76.	13.5			
5	開化小学 女日用文全 明治26年 (1893)	53. }									28.5 }		24.5 }						
		55.	26.5	28.5	32.5	152. 内外	11.5	8.5		62.5	30.5	21.	26.5	15.	68.5	13.5	11.5		
6	裁縫指南 明治40年 (1907)	凡																	左の寸法は大人並の寸法である。しかし衣服は其人々の身体によりて寸法を定める。
		61.	24.5	24.5	32.5	152.				62.5	28.5	23.	23.	15.	76.	13.5	11.5		
7	新編裁縫教科書 明治44年 (1911)	23. }						裁切り											普通寸法の標準を示したものなれども、人々の身長・肥瘦及び用途等によりて多少の斟酌を要す。
		59.	24.5	24.5	32.5	148.	11.5	9.5		62.5		23.		15.	72.	13.5	5.5		
8	家庭教育 新撰裁縫の菜 裙法新案 大正6年 (1917)	21.	24.5					8.5 }											袖幅は肩行の都合にすべし。 身丈は着丈に依て斗る事で好みに応ずべし。
		24.5	30.5			13.5	9.5			61.	28.5	24.5	24.5	15.	72.	13.5	12.5		

9	裁縫新教科書 大正13年 (1924)	57. {	23.	25.	32.	145.	15.	13. {	裁切り 9.5	62. {	62.5	28.5	23.	23.	15.	75.	13.	11.	ここよりメートル法による。
10	中等教育 裁縫教科書 大正15年 (1926)	60. 内外	23.	25.	32.	148. 内外	13.	8.5		62.	28.	23.	23.	15.	75. 内外	13.	狭襟 6. 広襟 11.	この寸法は中年の婦人を標準としたもので、着る者の年齢・体格・着方によって斟酌する。	
11	尋常小学 裁縫新教授書 昭和7年 (1932)	60.	23.	25.	32.	約 148.	13.	裁切り 10.		62.	28.	23.	23.	15.	75.	13.5	狭襟 6. 広襟 11.		
12	家庭科教科書 昭和13年 (1938)	60.	23.	25.	32.	148.	13.	裁切り 10.		62.	28.	23.	23.	15.	75.	13.5	狭襟 5.5 6. 広襟 11.	若年用・中年用・老人用の3種類に分けている。この表には中年用を記入。	
13	中等被服 昭和19年 (1944)	38.	21.	23.	32.	150. 内外	13.	8.5	1. { 2.	62.	28.5	23.	23.	15.	76.	13.5	5.	腰骨の下5cmぐらいの所から足の甲まで(身丈の2分の1)。	
14	家庭 中学校 第二学年用 昭和22年 (1947)	18. { 23.	18. { 23.	33.	150. ぐらい	13.	8.5		63.	29.	23.	23.	15.	75.	13.5	5.5	身丈は身長による。それで丈は形によって決める。		
15	和裁提要 昭和25年 (1950)	60.	23.	23.	32.5	150.	13.	裁切り 9.5	2.	62.5	29.	23.	23.	15.	76.	13.5	挽襟 上 5.5 下 6.5 広襟 11.	表の寸法は中年婦人で実際の場合には各自の体格に応じて寸法を加減。	
16	新版 和服裁縫全書 昭和37年 (1961)	50. { 55.	21. { 23.	32. { 33.	裁切り 155.	13. { 15.	裁切り 9.5	2. { 3.	62. { 64.	28. { 29.	22. { 23.	23. { 23.	15. { 15.	76. { 78.	13.5	狭襟 5.5 広襟 11.	着丈とゆきは必ず採寸をする。20才前後、30才前後40才以上の3種類に分けている。30才前後を記入。		
17	被服 I 昭和48年 (1973)	49. 内外	21. { 23.	23.	33.	154. 内外	13. { 15.	8.5 { 9.	2. { 3.	28. { 64.	21. { 30.	23. { 23.	25. { 25.	15. { 15.	77. 内外	14. { 14.	狭襟 5.5 広襟 11.	袖丈袖付けが若向き・中年向き・老年向きに分けてある。中年向きを記入基準となる身体各部の参考寸法記入。	

〔備考〕  
 ① 大正13年(1924)刊「裁縫新教科書」以降は寸法がメートル法で表示されている。  
 ② 大正6年(1917)刊「新撰裁縫の菜」以前は寸法が尺貫法で表示されている。これを比較検討するためメートル法に換算した。換算の際、釐尺1尺を38cmとし、小数点以下1位を2捨3入した。  
 ③ 昭和48年(1973)刊「被服I」の標準寸法は「基準となる身体各部の参考寸法」をもとに決められている。女子の基準となる参考寸法は身長154cm、背たけ38cm、首まわり36cm、胸囲90cm、ゆき64cm、としてある。

とくに、近世からの往来物の流れを汲むものや、一般の主婦を対象として編集されたもの、あるいは教科書用として作られたものと、それぞれその特徴がにじみ出ているようである。それはそれとして、標準寸法も時代とともに移り変わるものだということを目の当たりにしたのがこの表である。いっけん似たような数字の羅列であるが、よく考察すると100年余の時代の変遷を物語っている。和服が日常着であった時代、戦時中の物資節約に明け暮れた時代、そして昭和20年を境として30年代の後半から、女性の体格が急速に良くなってきた時と、洋装のような華やかな流行による変化はみられないが、それぞれの時代や着装の変化が標準寸法に表われている。

まず、その時々流行や着装の変化によって変動しやすいものに袖丈と、これにともなう袖付寸法が掲げられる。和服のなかでその変化が一番目に付きやすいのは袖丈であり、また、人々の好みや用途・年齢などを表現しやすいのも袖丈である。従って、その時々流行により、その時代の経済の繁栄ぶりを担うのが、色彩や文様とともに袖丈である。もう一つ、着装の変化がよく表われているのが袖付寸法である。帯を腰の所に結んでいた江戸時代から、着物をはしよって着る時代へと進み、さらに帯を胸高に華やかに結びあげるようになるにつれて、その着装に便利のように、袖付寸法は少なくなっている。

この着装の変化と体の発育の動向に左右されているのが身丈である。明治以降、女性が長着をはしよって着る習慣が定着してからは、着物の丈にこれほどの変動があろうとは考えおよばなかったのである。明治時代、裾も長く上半身もゆったりと着た時代から、大正期をへて昭和初期と、女性が職場に進出して、裾も短めに上半身もきりっとした姿に着装するようになって、身丈は比較的短めに推移している。昭和22年（1947）7月に発行された国定教科書『家庭 中学校第二学年用』に「身丈は身長による」と書かれてからは、おおむねこの線が守られているようである。文部省編纂の『学制百年史』の資料に基づいて、18才女子の平均身長を調べると、明治33年には147 cm、大正9年に150.3 cmと150 cm台に達している。そして、昭和23年には152.8 cm、43年には154 cmとなった。このように女性の身長は着実に増加してゆくなかで、それぞれの時代の着装の変化や身丈に対する考え方の推移が標準寸法の決め方に表われている。

この身丈の変化に対して、肩ゆきの寸法には大きな変動がみられない。これは和服を縫製する布幅が36cm前後の並幅ものが多く使用されるためや、縫製上の問題もからんでいるものと思われる。しかしながら、昭和30年代後半以後の肩ゆきは徐々に長くなりつつある。洋服の長袖を着馴れた人々にとって、肩ゆきの短いのは着ごちが悪いであろう。そして、現在は需要に応じてキングサイズと称して42cm前後の布幅のものが生産されている。

このように変動の激しいものに対して、先にも述べたように、身幅は比較的变化の少ないものである。衿幅、合づま幅が先に固定化し、ついで後ろ幅がこれに続いている。大正末期に23cmと幾分

狭くなった前幅が、現在でも標準寸法として掲げられている。衽幅や合づま幅の固定化は、もちろん前腰幅のどの位置に縦の線が入ったのが一番すっきりした姿になるかという、審美眼的な感覚が長い間に養われ、それが衽幅を決めたのであろう。しかしながら、布幅の一定化、一斉教育による裁ち方の合理化がこれに拍車をかけたものと考えられる。現在、割り出し寸法により体型に合わせた身幅の算出方法も各方面で試みられている。

和服の着装美は衽元にある。この衽元を構成する要因の一つに衽肩明き寸法がある。この衽肩明きの寸法は明治24年（1891）刊の『裁縫獨稽古』に裁切り9.5cmと記されて以来、昭和7年（1932）の『裁縫新教授書』で10cmとなるまで一貫して9.5cmと記され、その後もこの両者の数字が保たれている。衽の後ろを形成し、ひいては肩回りの衽付線や前の打ち合わせ方にも影響を与える衽肩明き寸法の0.5cmの変化が、どのようにして生み出されたかは、今後、実験を重ねてゆく上で、一つの課題として留意しておきたい。

このようにみえてくると標準寸法は決して固定されたものではなく、その著者、その時代、着装方法の相違、体位の向上などによって常に変化しているものである。江戸中期以後、長着の形態が一定化した以上、寸法にも大きな変化を期待するのは無理である。しかしながら、いつの時代においても基準となる仕立上がり寸法を記入しながらも、体格の大小や年令の相違を常に配慮すべきことが記されている。そして、標準寸法の表示の仕方にも変化がみえはじめ、昭和30年代を過ぎたころからは寸法に幅をもたせて、一定の枠内ではあるが体格の違う人々に利用しやすいように配慮したものとなっている。実際、日常着として和服を使用し、自らの着物を自分で縫製していた時代は、長い着装経験から、極く自然に自分の体型に合わせて縫製するようになる。これが「人の縫った着物は着にくい」という言葉になって現われたのではないと思われる。そして、多くの独習書のなかに、太った人、やせた人を配慮した縫製技術が記載されている。それにもかかわらず現在でも、標準寸法は一つの決定的な寸法として存在しているのも事実であり、これになんらかの拘束力を感じずるのもまたいなめない。こうした観念が生れ育ったことには種々の要因があろう。例えば、和服がゆとりの多いものであり、着装によってその個性を発揮し、その時々気分を出し得る衣服であることが最大の要因である。その外、明治以降の学校教育のあり方にも基因しているであろう。また、明治以後、急速に発展してきた洋裁にも流儀が厳然として存在するように、それ以上長い歴史を持つ和裁に、幾つかの流れがあるのは当然である。これが縫製技術に、ひいては寸法の決め方にまで及んでおり、これを守っていこうとする態度が、意志的、無意志的に働くのもまた否定できない。

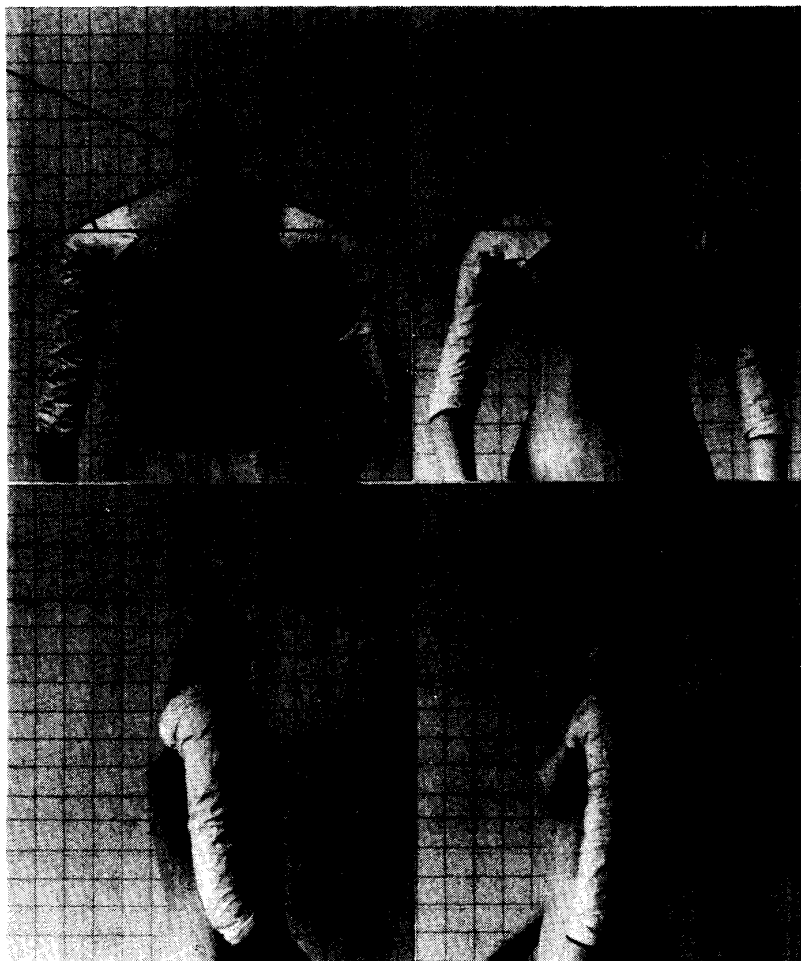
以上、標準寸法を調査分析することによって、これが時代とともに変化し、また時代に即したものにしようとする努力が常になされていることを把握した。そして、こうした努力にもかかわ



らず、一つの表示によって全体を把握することの難かしさを示唆している。人々が個性を着装という行為によって表現することに不馴れな時代に入っても、スタイルブックに出てくるような均一的な美を求めるのは好ましいものではない。縫製過程でそれが容易に吸収できれば、よりよいことは言うまでもない。そこで、現在まで長い間にわたって経験者たちが積みあげ、築きあげてきた標準寸法や、縫製技術を基にして製作した試着品を、標準形の和装スタンに着用させることから実験をはじめることにした。そして、現在の標準寸法によって作られた長着の長所短所を把握するとともに、今後、実験を重ねるうえでの基礎とする。

## Ⅱ 着 装 実 験

### 1) 着装実験に用いた和装スタン



背 面：左右の肩の傾斜角度      前 面：左右の肩の傾斜角度  
右側面：胸部上面角度      左側面：背部上面角度

第1図 着 装 実 験 用 和 装 ス タ ン

今回、私たちが実験に用いたスタンは昭和55年9月に家庭科教材株式会社より購入した3体の内の1体である。一応、一定の規格により製造されたものとはいえ、それぞれ全体のスタイルが異なり、着装した姿を美しくするためか直立したものではなく、少し左足を前に出し、右足に重心が置かれている。従って、下半身はもちろん、上半身も右肩が後ろに引かれ、左肩から胸にかけて膨らみがある。このスタンに頸窩点、頸椎点および頸付根側点を定め、それぞれに目印の待針を打った。そして、このスタンを5cm方眼の前に立て、前面、背面、側面より撮影したのが第1図で、これによって胸部、背部の上面角度、左右の肩の傾斜角度を測定した。なお、高さほか長さはガラス繊維の巻尺を用いた。その計測結果は第2表に示した。

## 2) 試着衣の条件

### i) 試着衣仕立上がり寸法

従来から和洋女子大学で教科書として用いている藤田とら著『改訂新版 和服裁縫』（昭和45年2月版）を規準として第3表のように仕立上がり寸法を決めた。

第2表 ス タ ン 計 測 結 果

測 定 部 位	長 さ	測 定 部 位	角 度
高 さ(頸椎点から床まで)	1 4 0.0 (cm)	胸 部 上 面 角 度	2 4.2°
頸 付 根 囲	3 9.0	背 部 上 面 角 度	2 3.0°
胸 囲	8 0.0	左 肩 傾 斜 角 度	2 7.5°
胴 囲	6 7.5	右 肩 傾 斜 角 度	2 5.5°
腰 囲	8 7.5		
ゆ き	6 8.0		

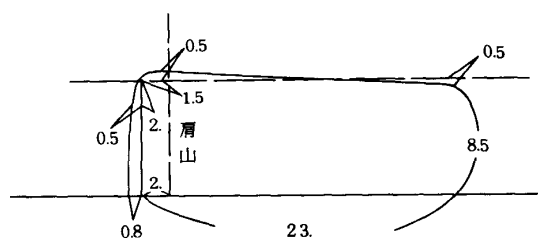
第3表 試着衣仕立上がり寸法

名 称	寸 法	名 称	寸 法
身 丈 (裁切り)	1 6 0.0 (cm)	衽下がり (衽肩明きより)	2 3.0 (cm)
身 八 つ 口	1 5.0	前 幅	2 3.0
衽 肩 明 き (裁切り)	1 0.0	衽 幅	1 5.0
繰 り 越 し	2.0	合 づ ま 幅	1 3.5
肩 幅	3 0.5	衽 下	8 0.0
後 ろ 幅	2 8.5	衽 幅	5.5

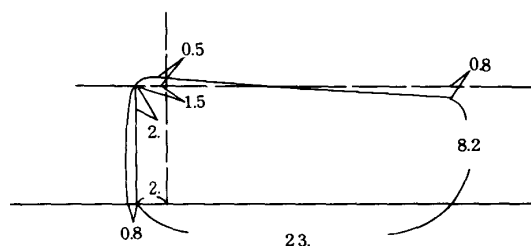
## ii) 衿肩回りの衿のつけ方

今回の実験の目的の一つに、従来からの縫製技術の比較がある。そこで、衿つけ、ことに衿肩回りの縫い方の違いが着装の際、どのような結果をもたらすかを観察するために、次の3種の方法で衿つけを行なった。〔Ⅰ〕は『和服裁縫』に記述されている衿のつけ方によるものとした。次にこれを基に、衿下がりの位置を衿肩明き寸法に対して少し前に多くずらせたもの、すなわち、衿下がりの間の衿付線の傾斜を少し多くしたものを〔Ⅱ〕とした。これは衿下がりの間の衿付線の傾斜を調査したところ、12種の裁縫書のうち衿肩明きより0.4～0.5 cm控えたものが6種、0.8～1 cm控えたものが6種あったため、この寸法の違いが着装にどのような影響を与えるかを追求するためである。〔Ⅲ〕は派手に衣紋を抜きたい場合の衿つけの仕方に背縫をつけ込むことがある。ここでは他のものと同様、2 cmの繰り越しをしたうえで、背の縫代を1.5 cmと他より0.7 cmつけ込むこととした。以上3種の衿つけの縫製を図解したのが第2図である。なお、衿つけのきせは0.2 cmとした。

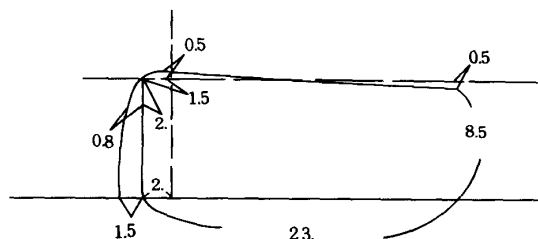
### 〔Ⅰ〕 『和服裁縫』による衿つけ



### 〔Ⅱ〕 衿下がりで0.8 cm控えたもの



### 〔Ⅲ〕 つけこみ



第2図 衿つけの図解

### iii) 試着衣の材料

試着衣は市販の縞木綿布を用いた。明細は第4表に示した。

第4表 試着衣材料

名 称	材 質 (%)	糸 密 度 (本/cm)		厚 さ (cm)
		た て	よ こ	
縞 木 綿	綿 100	33	32	0.05

### 3) 着装条件について

縫製した試着衣〔I〕をスタンに着せ、肩線に肩山を揃えて、自然に着装したものを規準とした。下半身は上前の衿下を右腰骨の位置に定めて腰ひもを締め、前腰幅の3分の1を目やすに衿付線の位置を決めた。上半身はおはしりを整え、身幅のゆとりは両脇に寄せて腰ひもを締めた。この形を基に次のような着装条件を定めた。

- A 肩山を肩線に合わせる。
- B 肩山を肩線より2cm後方に移動。
- C 肩山を肩線より1cm前方に移動。

なお、いずれの場合も前面の衿は頸窩点より3cm下がった所を交差位置と定めた。

### 4) 計測項目について

1. 背面中央での首から衿山までの距離。
2. 背面衿の傾斜角度。
3. 背面の肩山での左右の衿つけ間の直線距離。
4. 背面で左右の衿山間の直線距離。
5. 側面衿の交差角度。
6. 頸椎点から背中心の衿つけまでの距離。
7. その他、着装時に表われたしわの状態など。

以上の実験の結果は第3図に前面、背面を第4図に両側面を表示した。また、計測値は第5表に示す通りである。

### 5) 実験結果

第3、4図および第5表の計測値表から次のような結果が得られた。

第5表 計測値表

計測項目 試着条件		1	2	3	4	5	6	7
A	I	3.8	10.0°	20.6	13.8	54.5°	3.4	前面左の衿に斜めじわが少しできる。
	II	1.9	-10.0°	20.0	13.8	53.0°	2.6	三つ衿部分が反対曲線を描く。
	III	3.1	-1.5°	22.0	15.1	60.0°	4.0	前面衿に細かいしわができる。
B	I	5.4	22.0°	23.1	16.0	77.5°	5.8	身ごろは右肩衿付ぎわに斜めじわ。衿は衿肩回りが後ろに引けるための無理。
	II	3.8	9.0°	23.1	16.3	62.0°	5.1	三つ衿部分の衿付線が直線となり身ごろに横じわが出る。
	III	5.4	19.0°	24.4	16.9	79.0°	5.9	左右の肩に衿付に添って身ごろにしわがでる。
C	I	1.4	-9.5°	20.0	13.8	46.5°	2.1	身ごろの右肩にたすきじわが出る。
	II	1.1	-10.3°	20.0	13.1	53.0°	1.9	左右の肩にたすきじわが出る。
	III	2.0	-8.0°	20.6	13.1	56.0°	2.6	左右の肩にたすきじわが目立つ。

〔備考〕

① 2の背面衿の傾斜角度は頸椎点を通る垂直線に対して衿が開いている方を正数とし、首に近いものを負数として表示した。

② 5の側面衿の交差角度は左右の衿付と衿山を結んだ線の交差角度をいう。

試着衣Ⅰ

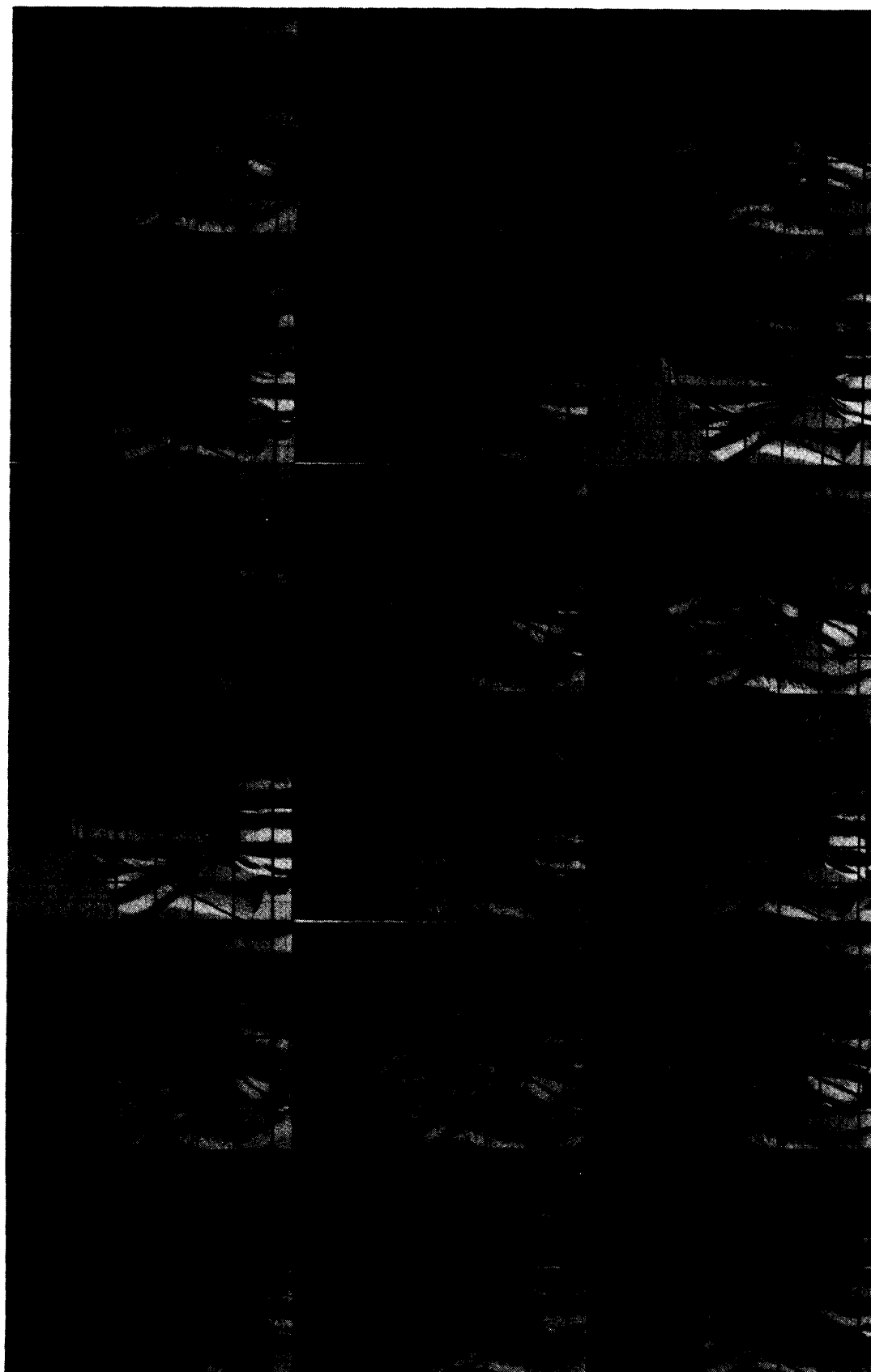
試着衣Ⅱ

試着衣Ⅲ

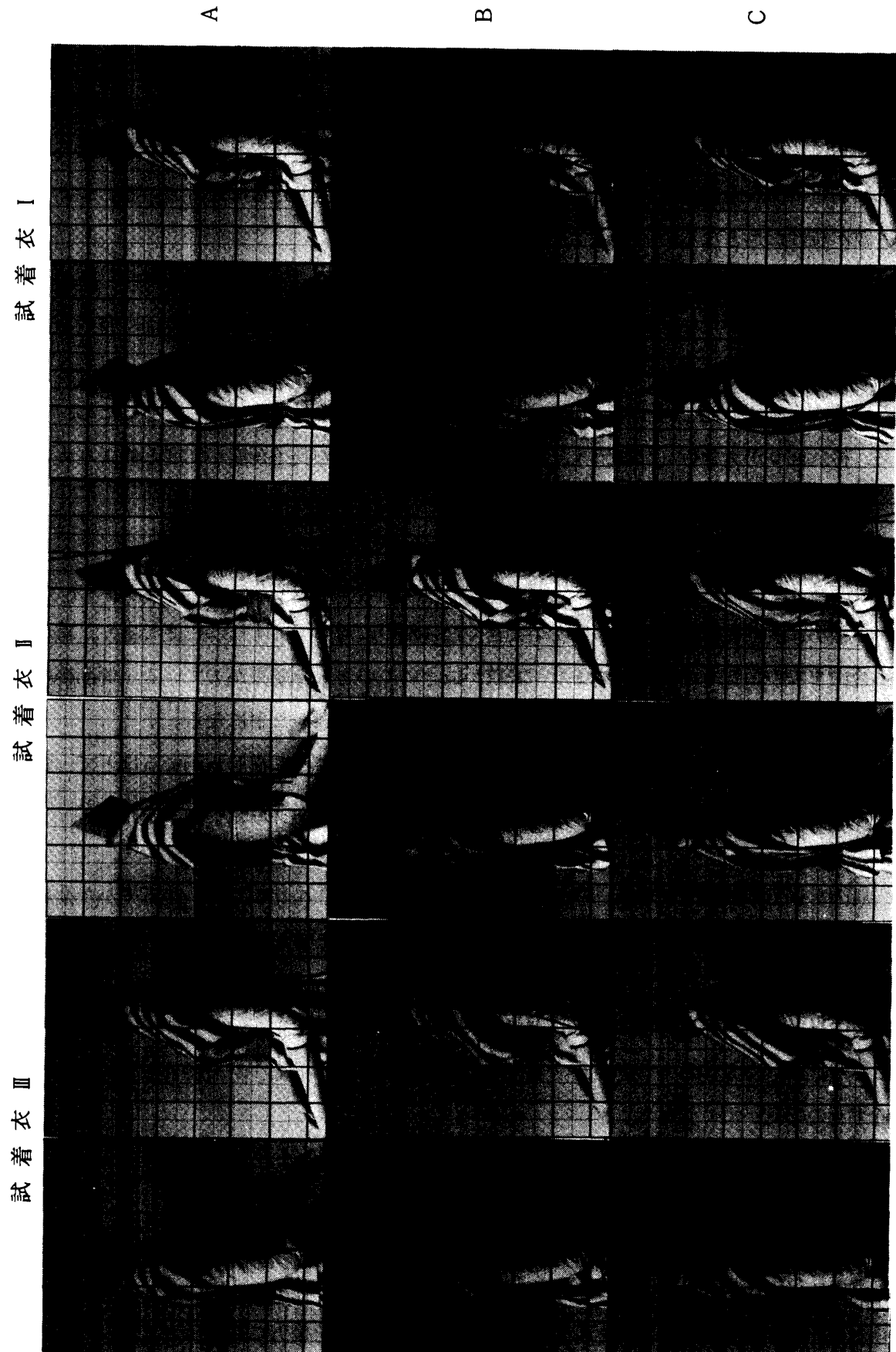
A

B

C



第3図 着装実験 前面・背面図 剣先、背面衿の交差角度



第4図 着装実験 側面図 背面衿の傾斜角度，背中心衿つけ点

### 着条件Aの場合

- イ 各試着衣とも肩山を肩線に合わせて着せたものが自然である。
- ロ 試着衣〔Ⅰ〕と〔Ⅲ〕の剣先がほぼ同位置にありながら〔Ⅰ〕の頸椎点から衿付線の距離が短く、横にも開いていないということは（計測値3，6）首にまといつく形になるため、首と衿山の距離が大きくなり、背面衿の傾斜角度が10度と正数になっている。つまり衣紋が抜けた形となる。
- ハ 試着衣〔Ⅱ〕は剣先が他よりも多少上にありながら、頸椎点からの距離も衿付、衿山の直線距離の差が少ない。従って、側面衿の交差角度が小さい。このことは前面に布のゆとりができ、衿付線に丸みを感じられる。
- ニ 試着衣〔Ⅲ〕は他と同寸の繰り越しをした上で1.5 cmの衿付縫代が取ってあるため、当然、衿付回りが大きい（計測値3，6）。従って、側面衿の交差角度が60度と他より大きくなっている。

### 着条件Bの場合

- ホ 試験衣〔Ⅰ〕はAの場合に衣紋が抜けているほど肩山を後方に移動しても抜けない。他の2種が20度前後背面衿の傾斜角度が大きくなったのに対して〔Ⅰ〕は12度であり、首から衿山までの距離も小さい。つまり、衣紋が抜きにくいという結果がでている。側面衿の交差角度は〔Ⅲ〕とあまり変わらないということは衿が横に開いた形になる。
- ヘ 試着衣〔Ⅱ〕は背面の衿つけが極端に真直ぐになり、身ごろに横じわがでるほどで、背面衿の傾斜角度が小さい。従って、側面衿の交差角度も62度と他と10度以上鋭角となっている。
- ト 肩山を後方に移動した場合、背面衿付線が〔Ⅲ〕は〔Ⅰ〕に比較して、ゆるやかな曲線を描いて柔らかみはあるが、衣紋の抜き加減はAの場合ほど差が認められない。

### 着条件Cの場合

- チ 肩山を前方に移動した場合は試着衣間に大きな差はみられないが、〔Ⅲ〕がつけこんであるだけ首へのまつわりつき方がゆるやかである。そして、〔Ⅱ〕が一番首もとに衿山が近づくので首が短く見える。

## Ⅳ ま と め

以上、着条件によって個々に比較検討を行なったが、もちろん、この実験結果から結論を導き出すのは早計に過ぎる。ただ、第一に言えることは和服は着装の仕方によって、前面を豊かに感じさせることも、やせて見せることもできる。すなわち、肩山を後方に移動すると太って見え



るし、前に移動するとスリムになる。第二に縫製の1 cmたらずの変化が大きく着装結果に現われることが確認された。ことに、剣先位置の0.3 cmの相違がこのような変動をもたらすとは思ってもよらぬことであった。

今後、材質の違いによる相違の追求とともに、多くの裁縫書に記載されている縫製上の変化がなにを意味しているかを究明したい。これによって、個人差のある体型と美的感覚を吸収しつつ、合理的に規格化しうるならば、つまり、洋服のような体型による分類が出来得るならば、既製品に幅を持たせ得るであろう。そして、学生指導の面でも画一的なものでなく、個性を生した和服を容易に理解させ、縫製技術の簡易化と合理化が計れるものと期待している。

### 〔 付 記 〕

本研究を作製するにあたって、永野順子助教授のご指導をいただき、和裁研究室の我妻美奈子講師、仲村洋子氏のご協力をえた。

### 引 用 文 献

- |                 |           |               |
|-----------------|-----------|---------------|
| をんなかゞ見          | ： 野田 彌兵衛板 | 慶安 3. (1650)  |
| 女文林寶袋 全         | ： 不明      | 元文 3. (1738)  |
| 訓 女論語襍寶 全       | ： 近江屋卯兵衛板 | 弘化 4. (1847)  |
| 女童 裁ぬひをしへ草      | ： 西郷 蓀    | 明治 8. (1875)  |
| 裁縫獨稽古           | ： 矢野武一郎   | 明治 24. (1891) |
| 開化<br>小学 女日用文 全 | ： 村田徽典    | 明治 26. (1893) |
| 裁縫指南            | ： 喜多見佐喜子  | 明治 40. (1907) |
| 類聚 近世風俗志 完      | ： 室松岩雄編   | 明治 41. (1908) |
| 新編 裁縫教科書        | ： 今村順子    | 明治 44. (1911) |
| 新撰裁縫の栞          | ： 福谷政吉    | 大正 6. (1917)  |
| 裁縫新教科書          | ： 伊藤英子    | 大正 13. (1924) |
| 中等教育<br>裁縫教科書   | ： 成田 順    | 大正 15. (1926) |
| 尋常小学<br>裁縫新教授書  | ： 文 部 省   | 昭和 7. (1932)  |

家庭科教科書	: 社會教育協會	昭和 13. (1938)
中等被服 二	: 文 部 省	昭和 19. (1944)
家 庭 中学校 第二学年用	: 文 部 省	昭和 22. (1947)
和裁提要	: 山本らく	昭和 25. (1950)
新版 和服裁縫全書	: 共立女子大学	昭和 37. (1961)
新和服工作	: 東京家政学院 和服裁縫研究会	昭和 41. (1966)
和 裁	: 土井幸代	昭和 44. (1969)
被 服 I	: 成田順他 11 名	昭和 48. (1973)
和裁の基礎	: 田京てる子	昭和 48. (1973)
図解和裁学習書	: 吉村八重野	昭和 55. (1980)
和裁 平面構成の基礎	: 熊田知恵・河村まち子	昭和 55. (1980)

### 参 考 文 献

改訂 新版 和服裁縫	: 藤田とら	昭和 45. (1970) 303 版
大裁長着の衿付線の作 図法	: 神田和子 本田雪子 木下陸肥路	昭和 50. (1975) 家政学雑誌第 26 卷第 7 号
大裁長着の衿付線作図 の解析幾可学的考察	: 本田雪子 神田和子 木下陸肥路	昭和 50. (1975) 家政学雑誌第 26 卷第 8 号
大裁長着の衿肩明きの 明け方	: 神田和子 本田雪子 木下陸肥路	昭和 52. (1977) 家政学雑誌第 28 卷第 1 号
大裁ち長着の種々衿付 け線の評価法	: 市川一夫 星野ハル枝	昭和 51. (1976) 衣服学会雑誌 Vol 20 № 1
被服構成学	: 梶山藤子	昭和 55. (1980)
新編 被服と人体	: 日本人間工学会衣服部会	昭和 56. (1981)